

岩倉寺文書目録刊行にあたって

岩倉寺文書目録 石川県鳳至郡岩倉村（石川県輪島市町野町西時国）
2019年12月15日刊行

岩倉寺文書目録刊行に寄せて

橘川 俊忠

昨年の11月、日本常民文化研究所の窪田氏から文書目録が完成したので、能登の岩倉寺に届けてもらえないかという依頼を受けた。大学を退職してから7年もたっているのだからどうかとも思ったが、今でも客員研究員であるし、岩倉寺文書とのそもそもの関係を考え、新学部の開設準備などで忙殺されている常民研の所員・職員の手助けにもなるということなので引き受けることにした。

常民研と岩倉寺との関係は、1952年に江田豊氏と宮本常一氏が時国家を中心とした能登半島の文書採訪調査の際に岩倉寺も訪問した時が最初とされるが、その時の詳しいことは不明である。本格的な調査は、1984年の時国家への借用文書返還から始まった神奈川大学日本常民文化研究所による奥能登調査の展開過程でのことであった。それから、14年後に研究所による同調査全体の終了まで断続的に同寺の調査が実施された。

この間の経過については、神奈川大学日本常民文化研究所奥能登調査研究会編『奥能登と時国家』（全5巻・平凡社刊）所載の網野善彦著「時国家と奥能登地域の調査」（調査報告編1）および拙著「同」（研究編2）に詳しい記述がある（参照を乞う。ちなみに、この調査自体についての詳細な記述は、類例をみないものであるが、調査自体がはらむさまざまな問題を検証する資料として重要な意味を持っていると考えている）。

1998年に能登調査を終了させたのには複雑な事情があったが、それについては前記報告を参照願うとして、その段階での岩倉寺文書の整理状況は、文書資料の1点ごとの番号の付与、整理封筒への封入、マイクロフィルム撮影と現地での基本的作業を完了するところまでであった。文書を読



写真1 岩倉寺文書の収蔵状況



写真2 岩倉寺の近景

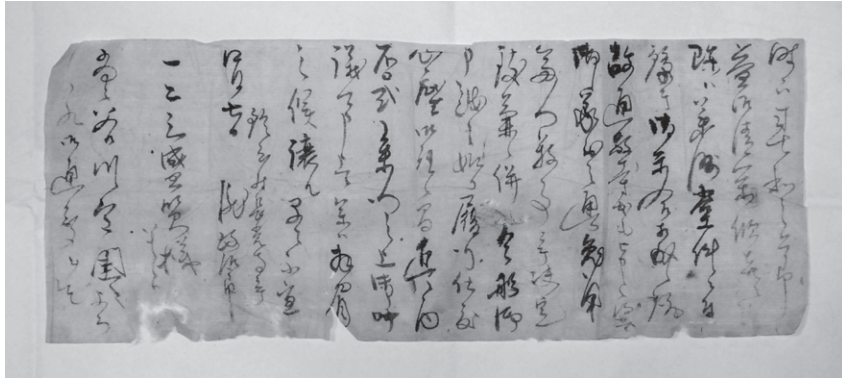


写真3 岩倉寺文書

み、必要事項を採取し、目録を作成するという作業が残されていた。しかし、研究所では、非文字資料研究の大プロジェクトの開始など古文書整理のための時間的・人的余裕もなく、不本意ながら目録作成作業に着手できない事態が続いてしまった。

その後、2011年になって、畠山聡氏を中心とする常民研奨励金による奥能登真言宗結衆寺院に関する共同研究がスタートし、岩倉寺文書についても目録作成と文書研究に着手されることになった。この研究は、さらに2014年から、宮野純光氏を代表とする科学研究費による共同研究「奥能登に



写真4 岩倉寺にて。一二三良子氏（中央）、津田良樹元所員（左）、筆者（右）

おける真言宗寺院の総合調査——町野結衆寺院を対象として——」に発展的に引き継がれ、その研究成果が2019年12月能登町柳田での公開シンポジウムで発表されたのである。

こういう経過で岩倉寺文書目録ができあがったが、かつて岩倉寺を訪れ、調査をお許し願ひ、途中まで整理に取り掛かった者としては自分の手で完成させられなかったことに忸怩たる思いを禁じ得ない。実際に目録作成にあたった畠山氏らの労苦に感謝するばかりである。また、調査収集した資料を、研究所外からの協力を得て整理するという形で公開した筆者が退職して以後の常民研スタッフの判断にも敬意を表しておきたい。

かくして、筆者は、この公開シンポジウムに出席すると同時に、岩倉寺にできあがった文書目録を直接届けるために、時国家調査の同僚でもあった津田良樹氏にも同行を依頼し、十数年ぶりに能登の地を踏んだ。シンポジウム開始前、能登空港でお会いした時国家調査以来お世話になった輪島市の砂上正夫氏夫妻と共に岩倉寺を訪ねて、一二三氏に目録を直接お渡しすることができた。寺や岩倉山の様子は変わりなかったが、住職はご子息に代替わりされたとのこと、時の流れの速さを感じ、しばし感慨にひたったことであった。

■ 2019年度の活動

- 「奥能登における真言宗結衆寺院の総合調査」公開シンポジウム出席と『岩倉寺文書目録』刊行報告、石川県立博物館（金沢市）資料調査 2019年12月14日～16日 石川県鳳至郡能登町柳田、輪島市町野町、金沢市 橘川俊忠・津田良樹